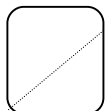


宮沢賢治「よだかの星」⑥

名前



○つぎの文章を読んで問題に答えましょう。

よだかはがっかりして、よろよろ落ちて、それから又、四へんそらをめぐりました。

そしてもう一度、東から今のぼった天あまの川がわの向う岸の鷺わしの星に叫びました。

「東の白いお星さま、どうか私をあなたの所へ連れてって下さい。やけて死んでもかまいません。」

鷺は大風おおかぜに云いいました。

「いいや、とてもとても、話にも何にもならん。星になるには、それ相応そうおうの身分みぶんでなくちやいかん。又よほど金もいるのだ。」

よだかはもうすっかり力を落してしまって、はねを閉とじて、地に落ちて行きました。そしてもう一尺で地面じめんにその弱い足がつくというとき、よだかは俄にわかにのろしのようににそらへとびあがりました。そらのなかほどへ来て、よだかはまるで鷺くまが熊くまを襲おそうとさするように、ぶるっとからだをゆすって毛をさかだてました。

それからキシキシキシキシキシッと高く高く叫びました。その声はまるで鷹たかでした。野原のほらや林はやしにねむっていたほかのとりは、みんな目をさまして、ぶるぶるぶるぶるえながら、いぶかしそうにほしぞらを見あげました。

夜よだかは、どこまでも、どこまでも、まっすぐに空へのぼって行きました。もう山やま焼けの火はたばこの吸殻すいがらのくらいにしか見えません。よだかはのぼってのぼって行きました。

寒さにいきはむねに白く凍りました。空気がうすくなったために、はねをそれはそれはせわしくうごかさなければなりませんでした。

それなのに、ほしの大きさは、さつきと少しも変わりません。つくいきはふいこのようです。寒さや霜がまるで剣のようによだかを刺しました。よだかははねがすっかりしびれてしまいました。そしてなみだぐんだ目をあげてもう一ぺんそらを見ました。そうです。これがよだかの最後でした。もうよだかは落ちているのか、のぼっているのか、さかさになっているのか、上を向いているのかも、わかりませんでした。ただここもちはやすらかに、その血のついた大きなくちばしは、横にまがっては居ましたが、たしかに少しわらって居りました。

それからしばらくたってよだかははつきりまなこをひらきました。そして自分のからだがいま燐の火のような青い美しい光になって、しずかに燃えているのを見ました。すぐとなりは、カシオピア座でした。天の川の青じろいひかりが、すぐうしろになっていました。

そしてよだかの星は燃えつづけました。いつまでもいつまでも燃えつづけました。今でもまだ燃えています。

問題

「燐の火のような青い美しい光になって、しずかに燃えているの」はなんですか。

答えを本文中のことばを使って答えましょう。